

BEACON公開座談会

記憶をめぐる

ゲスト 菅原和孝

出席者 安藤泰彦、稲垣貴士、小杉美穂子、吉岡洋(司会)

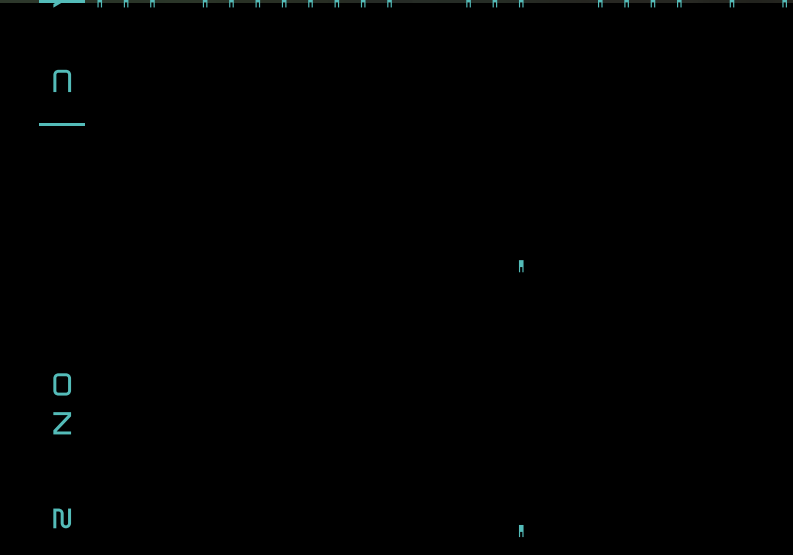
(吉岡) 『BEACON』は今回が三回目ですが、これは最初に五人のメンバーで話しあった時から「記憶」がテーマです。精神分析では、記憶を思い出すことにより治療しますが、フロイトとかを讀んで分かるように必ずしも記憶を口づつものは客観的に本心に起ったことが思い出される、というところはないですね。客観的には誤った記憶、起らなかった出来事についての記憶、ところがそれが治療においては有効である。

今の時代「これほどパソコン、インターネットが広がって機械的な記憶のシステムの強力さに影響を受け、人間の記憶もまるでコンピュータのメモリーのように考えがちではないか。もうと生きた記憶の複雑さとかタイナミックなあり方を考えていきたい。機械的な記憶ではなく人間の記憶は常に感情というものと不可分ではないかと…。そういうことを考え、アーティストワークよりもっと広がったところで話したい」ということで、今回、感情の研究者、菅原先生に来ていただきました。

語りの反復と記憶

(菅原) 大学院生までは、豊長類の研究をしていました。一九八二年からはずっと、いわゆる、フシシツバ、自分たちのことを、ケイ、と舌打ち音で呼んでいる。世界で最も音韻体系が複雑だと言われている人たちの聞き取り調査をしています。二〇一〇年くらいは、比較的年配の人たちから生活史の語りを採取しています。それらの話はすべて記憶なんです。その中で私が記憶というものをテーマ的に考え始めたのは、私の最も親しい調査助手のお父さん、「ドネツバ」という方なのですが、そのまたお父さんが「ドネツバ」の若い頃ライオンに喰い殺されたということがあって、どんな話かという…。

彼と一緒に出かけた同じキャンプの男がいたのですが、男はお父さんと別れて、夕方水を飲み、大木の所へ…。すると、大木の下で子育てをしている気の立ったメスのライオンがいたんです。男は自分の狩猟袋を取り落として、慌てて逃げ帰った。そのことを男はドネツバに得々と話したんです。ドネツバはその話を聞いてとても腹を立てた。男は途中でお父さんを見かまして、あそこ



はライオンがいるから注意するまじだ」と言うべきだったんです。

翌朝、お父さんの足跡を調べてゆくとやはり大木の所に行っていた。大木の上の方に何かがつながっていて、ドネツペは、それはお父さんが朝着て出かけた上着だと気づいた。男の方は自分の事しか考えないばかりで、あれは自分が落とした狩猟袋だ。」と。二人で指差して言い争っている。ライオンがその声を聞きつけて襲いかかってくる。二人で必死に逃げ帰った。その翌日また行ったら、禿鷲がグルグルと回っている。ライオンが食べ残したお父さんの死体を食べている。で、彼はそれでお父さんの死を確信した。そういう話です。

私が記憶と「記憶」で、非常に面白いと思ったのは、その話を初めて聞いて二年後でした。ドネツペのお祖父さんの話を別のテーマで収録していたのに、「あれよあれよ」という間に同じ話になる。私は同じ話を収録するのとも思っていて、新しい話題を引き出すつもりで、俺の話はまだ終わってない」と最後まで話し続けた。

ある時思い立ち「記憶」の語りを厳密に比較してみた。全体的には全く同じ語りだと思える



TAKASHI ITO



YHO YOSHIOKA



YASUHIKO ANDO

は、「記憶と語り」という問題です。私はその時、出来事の一歩底にある身体の関わり方、それを私は「身体配列」と呼んでいるのですが、身体配列の問題が大事ではないかと。

これもまたライオン話なんですけど、夜、小屋の中で夫と妻が仲良くいちゃいちゃしていた。そこにオスのライオンが飛び込んできて、妻の肩をがむ」と啞えて小屋の外へ引き摺り出して、みんなが慌てて駆けつけてきて、引き離してライオンを追い払ったんだけど、その時にはもう妻は死んでしまった。そんな話をおお爺さんがしてくれた時、私の調査助手を急に立たせて、砂の上に座らせて、「いきなり振りつけめいたことをした。彼と爺さんが足を絡ませた。」と。そうじやない、じやない。」と。

その時爺さんは何を説明したかったかという。被害者の妻は悪か者だったから、戸口から覗き込んだライオンを大と間違えて、全然叫び声をあげなかったのは仕方なかったとして、しかし何故、あの賢い妻がライオンに気づかなかったか、それは、二人が足を絡ませて座っていて、妻は戸口に背を向けて気づかなかったからだと。たったそれだけのことを再現するために、わざわざ

に個々のセンテンスはほとんど一致していない。全体としては同じストーリーなのに違っている。構成が違っていて、第一パーションではすくもむらに季節のことが話されていて、第二パーションでは、一気にその話のさわりが最初に来る。彼は同じ話を音原にしているというのを意識して、非常に思い切った編集を施しているんです。起承転結の「結」の部分もがらりと違っている。第一パーションでは全然無かった話にして、お父さんの死の悲しみから立ち直ろうとして、そのキャンピングに出かける話がある。その遠くのキャンピングに行く途中、空でものすごい音がした。またライオンが吠えているのがと戻って回りを見たら見たこともない巨大な鳥が飛んでいる。それが、ドネツペが生まれて初めてセスナ機を見た経験なんです。

語り」として考えて、私は「一方は、ジャズインの性、セクシマリアムにだわっているのですが、その比喩で言う、人間が生殖するところ、人間の身体が同じ社会で再生産されるんですが、人間が過去の出来事を語るというところ、その社会の歴史が継承される。インジネーションとしての社会と語りが、語り」による

と実際の身体配列をその場で実現したというの、私は「まじだ」。

それと、さっきの同じ話を二度繰り返すという話に戻ると、ほとんどの文章は違っても、一ヵ所だけ、ものすごく似たところがある。ライオンが襲いかかってきた時、間抜けな男が前を先に走っていた。ドネツペに、「助けてくれ、俺を見捨てるのか!。」と叫ぶところ。お父さんがライオンに殺されたという話にも、「マ」になる身体配列があって、語り手の自分が走っていて、その後ろを間抜けな男が走っていて、そして、「豆粒ほのライオンがいて、そこで、助けてくれ、俺を見捨てるのか!。」という声が飛ばされた。これも一つの身体配列と「まじだ」に「身体配列」という概念を拡張させていくと、私は高木光太郎の「シマ」論と全く同じことを言っているのと同じだ。

フランスの映画監督クロード・ランスマンが九時間に渡るインタビュー映画を撮っていて、その中で床屋の場面があるんです。それは丹室に送られる女たちの髪を切らされた男に、実際の理髪店の中で髪を切らせながら撮ったシーンです。床屋が、私達も一杯やっただ」と言っ

再生産される。そのポイントも同じところが反復して語られるというところ。「記憶語り」の本質的なものは、反復するところだと思える。それをこの日本の状況に引き写すと、かつては戦争体験のある人たちが延々と戦争体験を語って、若い者はそれで、耳にタコができることなる訳ですが、しかしそれは浅はかな態度で、むしろ同じことが反復されて語られる時に、記憶がその場で「デ・モディフィカ」(de-modify)されるのが私は大変面白い。

(吉岡) 記憶とその反復、まさに差異の反復。繰り返しの話に聞こえるけれど、実は全部違っているというところがすごく面白い。大人になると「話の内容として同じだ」と言つけれど、子供の頃はよく好きなアニメのビデオを撮ってみせると、擦り切れるまで見る。

身体配列と記憶

(音原) 私がもう一つお話ししてみようと思ったの



ですけど、監督がそれを残酷に撮っていて、俺が聞いているのは、そんなことじゃない。お前が髪を切る時、部屋には女たちがいたのか、そこでお前が入って行ったのか、それともお前がいた部屋に女たちが入ってきたのか。そう言われた床屋は、「今日は嫌な予感が出てたけど、こんな日になるなんて」と泣き出してしまっ

高木は、「まじだ」ランスマンがやったことは、過去の出来事で人間はどういう身構えをしていたかというところをその場でそのまま再現することである」と。水口トリスは終わっていました。たわけじゃなくて、今「こ」で身もたえをする床屋の身体に、私たちが水口トリスを直接、知覚する、というすい文で、私が「身体配列」と呼んでいるものと高木が「身構え」と呼んでいるものは、きつと同じもの。さっきの出来事の共有とが継承とかを考えると、私はいつも基本的に「誰と誰がどういう身体配列をどうしていたのかを重要視する」。それが私達が「ロシカ」とか「ナガサキ」をずっと忘れないために必要ではないかと最近考え

ています。

(吉田) 我々が「ロシアン・ナカサキ」という場合の記憶は、基本となる配列の部分ではなくて、「summary」といって、そのレベルの記憶のあり方なんですな。

(菅原) 高木さんはそこを辛辣に言っていて、「想起して言葉にする時、陳腐化が始まり、神話化が紛れ込む」と言っています。言ってみれば語り手が都合の良い表象をその場で聞く人に合わせて立ち上げようとする。陳腐化・神話化を遮断する必要があります。

(福道) 映像の場合も、見る者と映像の身体的な関係性がものすごく大きいんですね。「BEACON」でも我々が映像として登場してきますが、等身大なんですな。下手も全く同じように、「意図してあの映像サイズにしているんですわ。映像は大きい画面で見ても小さい画面で見ても意味的には同じじゃありませんが、明らかに受け取り方は違ってくる。

それともう一つ言葉の問題というのが音の問題が重要になってくるんだと思うんですわ。音というのは必ず物質を媒介して伝わります。語の振動は波動が直接の脳に伝わるとして

すわ、聞く時も何らかの物理的な媒質を通じて必ず身体的なものを介して入る。

声と擬音

(安藤) 「語り」の話がありましたよね。その中で身体配列として語り手の中で身体化されているのは引用された呼び掛けで、全体の筋を語る「語り」とは種類が違います。身体化されるという時、語りの中で引用された誰かの言葉や「うーん」擬音」というのが重要かと思いますが。

(菅原) 長い語りを全部筆記するとB5版の大学ノート100ページくらいになって、そんなの出版するわけにいきませんからでい

クランプするんですね。その時に「一番いいクランプしたい」と思う部分があるんですけど、直接話法による引用と間投詞ですね。「ふーん」とか「あい」とか「さ」とかそれから非常に発達している擬音語、擬態語……。というのはいま、人間が発する生々しい声というのには、その出来事の一歩の核心部分。嫉妬とか怒りとかを掻き立てるある事が起きた時、その時の心のつわりのというのには、声に凝縮されていくのではないかなだから長い話をサマライズ(summary)する時はその心のつわりのが「一番鮮明に浮かび上がる」ところのような登場人物の台詞をピックアップしていきます。

また、「グイト」の言語はものすごくたくさん擬音語・擬態語があるんですがそれは何のためかと言えば「一番発達しているのは動物の歩き方、走り方を描写する。ですからキリンなどの動物、それぞれの種類ごとにその擬音が違ってくる。私達が聞いてもそれが動物の特性とどういう風に結びつけているのか分かりませんが、彼等の場合は狩猟採集民だけあって動物に対する精密な観察という文化的なものがある。

聞こえるか聞けないかの音

(菅原) 私が最も好きな映画は『チリ・ムネ・ヒメ』という鈴木清順監督の映画があります。あの映画のテーマは音だと思っんですけど、瓦屋根の上に落ちた小石が、からんからん」と転がる、そして妹が重病で、「大丈夫かしら」とって心配そうに話してると、「何処からか」と、さしだめだめという声も聞こえてきます。あの音、あの音だから、今日の作品の中で出てくるリアルに近い音、そのようにたまたま音で記憶とどうつながるかが面白いです。

(福道) 映画の音楽、音というの極めて記号化された音を使うんですね。だから、それは実際の音じゃないんですね。典型的なのは、



という、あんな音、出るわけないのに、記号化されて使っているわけです。今回は、むしろ無意識、気づかないような音を使いたいというのが、基本的にはのたんだすな。

(菅原) オーストリアの女性人類学者が、カリマンタンのロング・ハウス、長い家で何世帯も住んでいるという居住スタイルがあるんですが、そこに長く滞在して、素晴らしい論文を書いているんですが、そのロング・ハウスは天井がなく、居室の上が全部筒抜けなんです。そうするとすべての部屋で話している声がロング・ハウス中をいつも満たしていて、時には隣室とかいっつか指いた部屋で壁越しに会話している。それが一つの声の共同体として、ロング・ハウスをいつも包んでいる。そんな話がすごく生々しく書

だげ、何が起きないかというのばかりで、
カレにされてい。



「小杉」の「BEACON」の作品も「コンテ」
タがなからたらでまなき作品ですが、しかし実際の
の作品は「コンテ」として、観客は「コンテ」の歩
回りのなげはばならぬか、寝転がらなければ
ならぬとか、笑、
また「コンテ」の耳を
ましてもらわなけれ
は音を聞き逃してし
まう。あるいは、音原
さんが話を採取され
る時の話を聞く、
そこには空間がある
んですよ。音原先
生と現地の人の
場、みたいなものが
浮かび上がってくる。そういう場、というものが
「コンテ」スタートする時に、すい、く大切なものな
ないかて、...

変哲せなき風景



けれど、そういうイメージが、どこかで、もしか
したら無意識の内に織り混ぜられていられるかもし
れませんね。ともかく特別な場所であり、かつ、
どこでもある場所、一律肯定する、あるいは場所を
選んでい。

(吉) (画) 明らかに失われたもの、本場に懐か
しくも、おかしなことに、そういう風景と、こ
たものは、どこにもないのに、日本の原風景とい
うのは世代を越えてみんな同じものになってし
まう。プロトタイプみたいなのがありますが、そ
れと比べると全く逆に、誰でも同じものを目にし
たような映像だ。

(音原) 私が今日の作品を見て、「一番思っ出した
のは、大島清監督の『東京戦争戦後秘話』という
映画です。自殺してしまっただ映画青年のカメラに
残っていたフィルムというのが何の変哲もない風
景、なんでも「なんすまらぬいものを撮ったんだ
」と残された友人たちが同じ風景を訪ねて歩く、
というのが、その映画なんですけど、何の変哲の
無さ、というのが、今日の作品の大きな長所、重
要なポイントですね。



(音原) (記憶と化した時、つまりそれは失われ
ていたものに向かい合う時に、「コンテ」は、吉岡さん
が言われた、精神分析的なものがありますよね、
それは自分の中に眠っているんだだけ、ある種、
無気味なものとして経験される。記憶の無気味
さ、というところが、一方にあって、もう一方は「スタ
ルシア」という、非常にやるせないものがあるわけ
です。あの作品を拝見して、最初は、わ、返屈そ
うだな」と実は思ったのは、何の変哲もない住宅団
地「オートバイのカー」が、はたは「して」と
か、「コンテ」の「コンテ」も見せられるのかなと
思っていた、(笑)途中から、「これはすいて」と
思ったんですけど、特に途中から回転の「ス
」が速くなりましたよね、それから「水」の「ス
」、「真白」になりましたよね、真「白」に「光」だけにな
った時に、制作者の思想として、無気味さ、とい
うものをすい、く感じて、「スタルシア」というもの
は、あまり感じ取れなかったのですが、そこから逆
は何かお考えが、おありですか。



(福垣) 自分たちにして原風景的なものとい
いますか、それを再現する、というのではないです



それと空間に関してですが、彼等は非常に優
れたナビゲーション技術を持っていて、地平線に
ぼつんと立っている高い木の形を覚えてい、るんで
すね、木の個体認識ですね、大体何十キロ、ここ
い時は何百キロが徒歩で旅行するんですけど、その
「コンテ」にある木の形を覚えていて地平線にAとい
う木が見えたら真直ぐ行っていて、そこから地平線に
見える別の木を、つまりAと線を辿って行ってい
るんですね。

想起のトリガーとしての「コンテ」では、彼らは鳥の
声が告知、告げ知らせている、という信念がある。「こ
れは記憶の一種ではあるんですけど、鳥が鳴い
たりするのをみると、「ほら、ほら」と言っていて、突然神
話を語り出す。鳥が持っている変な習性の起源を
説明する、まこととやかな神話を語り出す。その
いう意味では彼等が書き写している環境世界に、
例えば鳥の姿、といったものを結びつけて神話的世
界を想起させる、ネットワークといったものがある
んですよ。

(文責) 安藤泰雄

「地」地名をたて、というのには、出来事の一覧ですね。

